漱石作品『明暗』における談話分析

语言的背后

——夏目漱石《明暗》分析

吴少华 著

中国社会科学出版社

西安外国语大学学术出版基金资助

漱石作品『明暗』における談話分析

语言的背后
——夏目漱石《明暗》分析

吴少华 著

中国社会科学出版社

图书在版编目（CIP）数据

语言的背后：夏目漱石《明暗》分析／吴少华著．
北京：中国社会科学出版社，2008.12
ISBN 978-7-5004-7550-7

Ⅰ．语…　Ⅱ．吴…　Ⅲ．夏目漱石（1867—1916）-
长篇小说-文学研究　Ⅳ．I313.074

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2008）第 211192 号

出版策划　任　明
特邀编辑　成　树
责任校对　淳　然
技术编辑　李　建

出版发行　中国社会科学出版社
社　　址　北京鼓楼西大街甲 158 号　　邮　编　100720
电　　话　010-84029450（邮购）
网　　址　http://www.csspw.cn
经　　销　新华书店
印　　刷　北京奥隆印刷厂　　装　订　鑫鑫装订厂
版　　次　2008 年 12 月第 1 版　　印　次　2008 年 12 月第 1 次印刷
开　　本　880×1230　1/32
印　　张　8.375　　插　页　2
字　　数　208 千字
定　　价　26.00 元

凡购买中国社会科学出版社图书，如有质量问题请与本社发行部联系调换
版权所有　侵权必究

前　言

夏目漱石（1867—1916）是日本首屈一指的文学家，在日本近代文学史上享有很高的地位，被誉为“国民作家”。他的早期作品以独特的讽刺、幽默的风格，对日本近代社会予以有力抨击；后期作品主要以现代人的伦理道德问题为主题，利用细致入微的心理描写和心理剖析，揭示出个性解放与社会习俗的冲突。在日本，夏目漱石的文学作品直到今天仍影响巨大；在中国，他的小说一直作为日本近代文学的代表深受读者喜爱，尤其是近几年，夏目漱石小说的最新译本层出不穷。无论在日本还是中国，有关夏目漱石的研究更是内容广泛、百花齐放，相关论文和论著数量众多。日本甚至还有专门收集这类研究著作的图书馆。

但值得关注的是，在夏目漱石研究的众多成果中，多为作者研究、作品评论、作品鉴赏，以及文学表现技法等，通过对作品中人物语言进行分析，从而深层次剖析人物性格特征及心理变化的研究方法还不多见。而运用对人物内心世界精准、细微的描写来刻画人物关系和人物性格、推动故事情节发展这一表现手法恰恰是夏目漱石作品的一大特点。夏目漱石不仅较早地注意到作家和读者之间的交互关系，仔细设想作者创作与读者欣赏作品时的不同心理状态，更为关键的是，他十分注重运用场景对话刻画人物，从而表现不同人物的背景关系、人物之间的相互矛盾及心理变化过程。夏目漱石以善于运用细腻的语言表现人物内心性格而著称，这也是其作品一直以来被认为是日本现代文学创作之典范的重要原因。

近年来国际语言学界流行的谈话分析理论是对当今人类语言交流活动的本质、应用规律、表达效果等多方面内容进行广泛、深层次诠释的一项重要理论，受到包括语言学、社会学、心理学等各界研究人士的普遍关注。在日本语言学界，谈话分析理论同样备受瞩目，运用这一系列理论展开的各项日语研究颇为兴盛，产生了大量优秀成果。但是，将谈话分析理论的最新研究成果与近代文学作品相结合，将这一理论运用于分析文学作品中的人物语言和心理变化，从中解析作品内涵的研究基本还属于空白，尤其是对一代文豪夏目漱石的小说中细腻的人物语言背后所透视的复杂人物心理进行较为全面的阐释，这样的研究尚未更多地见诸于世。

在日本社会，为了达到良好的语言交际效果，人们根据对方的身份、年龄，相互关系，以及所处的场合、时间、谈话目的的不同等因素选择相应的语言表达方式，这种因人、因时、因地、因事不断改变说话方式的语言表达形式叫做“待遇表现”，是日语表达的重要特征之一。因此，从另一方面讲，利用人物对话的不同表达方式，即通过分析人物之间待遇表现形式的异同，同样可以分析、解读人物之间的上下、亲疏关系，或心理变化过程，以及时间、空间变化等，从而有助于更全面地把握人物背景关系，理解作品的内涵和本质。

本书正是利用日语表达的这一特点，将语言学领域的重要理论与文学作品分析有机地结合在一起，主要运用谈话分析理论对文学作品中出现的大量对话场面进行分析，通过解读夏目漱石笔下众多的人物形象，深层次剖析待遇表现形式的丰富内涵和多重用法，加深读者对作者人物性格刻画的理解。运用大量对话来刻画人物关系和人物性格是夏目漱石作品的重要特点之一，其主要作品中的人物对话比例几乎都接近甚至超过半数。无论是生活中的夏目漱石本人，还是他笔下的人物，都非常注重待遇表现形式

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

的细腻运用。通过认识夏目漱石作品为我们提供的语言交际场面，利用他所描写的人物的语言进行分析，无疑可以观察到人物对话中待遇表现形式的丰富性、多样性和有效性，以及人物语言对表现人物心理变化所起到的独特作用，帮助读者更准确地解读作品内涵。

本书旨在通过深层次剖析丰富的人物语言，试图全面、准确地阐释作者在不同的语言表达形式背后透视给读者的人物性格背景、人物心理变化，以及人物之间复杂的感情纠葛，从而更为透彻地诠释作品的人物关系、情节发展和表达效果，更好地理解夏目漱石作品所表达的真正内涵。希望通过本书为研究夏目漱石作品提供全新的研究方法，有助于帮助读者（学生）正确理解作品，同时对准确翻译作品也将提供有益的参考。

作　者

2008 年 11 月

目　録

第一章　敬語研究および漱石作品の資料性 …… (1)
　第一節　敬語に関する研究史 …… (2)
　第二節　敬語研究の課題 …… (4)
　第三節　筆者の敬語研究 …… (6)
　第四節　談話分析理論の枠組みについて …… (8)
　第五節　漱石作品を言語資料にする理由 …… (17)
　第六節　作品紹介と漱石略年譜 …… (36)
第二章　漱石作品の敬語・待遇表現の分析 …… (49)
　第一節　敬語・待遇表現の使い分けについて …… (50)
　第二節　社会的ファクターの変化による待遇表現の変化 …… (53)
　第三節　心理的ファクターの変化による待遇表現の変化 …… (64)
第三章　漱石作品の人称代名詞使用の分析 …… (83)
　第一節　『明暗』における人称代名詞 …… (86)
　第二節　『明暗』における自称代名詞の書き直しについて …… (105)
第四章　漱石作品の言い争い、非難場面の分析 …… (122)
　第一節　「体面威嚇行為」について …… (123)
　第二節　「ポライトネス・ストラテジー」について …… (126)

第三節　相手のフェイス侵害を及ぼさない「体面威嚇行為」……（129）
第四節　相手の消極的体面を脅かす「体面威嚇行為」……（138）
第五節　「体面威嚇行為」におけるフェイス侵害の変化……（146）
第五章　漱石作品の中国語訳の比較と分析……（154）
第一節　『明暗』における敬語行動の特徴……（154）
第二節　『明暗』の中国語訳における待遇表現の扱い……（158）
第六章　敬語・待遇表現指導の試論
—中国における日本語教育への提言—……（172）
第一節　敬語・待遇表現教育の課題……（173）
第二節　談話分析理論の理論的貢献……（185）
第三節　談話分析理論による敬語・待遇表現指導の展開……（191）

参考文献……（215）
附录1　『明暗』解説（大江健三郎）……（227）
附录2　夏目漱石年譜（熊坂敦子）……（240）
后记……（258）

第一章　敬語研究および漱石作品の資料性

はじめに

本書では、漱石作品の待遇表現を談話分析の観点から研究する。様々な状況のもとで敬語・待遇表現を用いる行為を取り上げ、対人コミュニケーションの中で能動的に捉え、敬語・待遇表現のそれぞれの側面を解明することを試みる。

日本語の特徴の一つとして、精密な敬語体系や様々な形の待遇表現があるという点があげられる。日本語話者は話し相手との社会的上下関係や親疎関係などによって、言葉づかいを変えている。特に、意志や心情を効果的に伝え、よい対人関係を築く言語行動の中核に敬語・待遇表現がある。

このことは外国語話者を対象に日本語を教授することにおいても大きな問題である。日本語を学ぶ外国人学習者にとって、敬語はなかなかうまく身につけられない難題である。いくら上手に敬語の語法を身につけても、現実の言語行動の中では、必ずしも適切に敬語・待遇表現を使い分けられるとは限らないという問題を抱え、敬語が日本語の中で一番難しいと考える外国語話者は少なくない。

文化・習慣の違い、生まれ育った環境の相違、母語に敬語表現が乏しいこと、また、日本語の敬語語法の難しさなどが、敬語の理解や学習の障害となっていることは考えられるが、敬語・待遇表現はただ規範化され、体系付けられたフォームの問題

だけではなく、言語行動の中で、対人関係・場・時・状況などによって時々刻々に能動的に変動する問題であるということが最大の難関であろう。日本語教育において、敬語・待遇表現の問題を談話レベルでの学習項目として扱う意識がまだ不十分なのが実状であり、敬語・待遇表現の研究は日本語教育にとって重要であることが明らかである。

本書では、従来の敬語・待遇表現の研究を発展させて、談話分析の観点からの研究を行うものを試みる。この観点が有効であることについて日本語の敬語研究の歴史をふりかえって、その課題をまとめておこう。以下、北原保雄『敬語』(1978　有精堂)、辻村敏樹『敬語論考』(1992　明治書院)、西田直敏「敬語史と現代敬語」(2003　朝倉書店)を参照にした。

第一節　敬語に関する研究史

日本語の敬語についての本格的な研究が行われるようになったのは、明治も中期に入ってからであったとされている。その後、敬語の本質について、起源と国民性とのかかわりについて、個々の単語や語法について、そして構文論的な把握のしかたについてまで、多くの研究、考察がなされているのである。

近代以後の敬語研究では、主として敬語の分類や構造面に関する研究が行われた。敬語の体系的認識と歴史についての最初の研究は三橋要也の「邦文上の敬語」(明25　皇典講究所講演)であり、敬語を全般的に見渡して分類した最初のものである。この時期、敬語論は文法研究の一環として扱われているが、「尊遇、卑遇、不定遇」の三つの待遇を認めた松下大三郎の『日本俗語文典』(明34　誠之堂書店)、敬語の種類を、尊敬、謙遜、丁寧に分けた吉岡郷甫の『日本口語法』(明39　大

日本図書）などに体系的な分類が見られる。続いて、三矢重松の『高等日本文法』（明41　明治書院）において、尊他敬語、自卑敬語、関係敬語、対話敬語、卑罵などの詳しい分類法を立てた。さらに、山田孝雄『敬語法の研究』（大13　宝文館）は、口語、候文、普通文の敬語法を説いた上で、敬語が称格（人称）に関連するものであるとして、この点から、敬語を謙称と敬称とに二分する。

昭和期に入って、松尾捨治郎『国語法論攷』（昭11　文学社）では、談話ないし記述には、〔甲〕談話または記者（自己）、〔乙〕聴者または読者（対者）、〔丙〕談話記述の材料、の三要素があるとして、敬語を〔丙〕の材料となる成分敬語と、〔甲〕と〔乙〕に関する非成分敬語とに大別している。言語過程説の観点から敬語の研究を行ったのは時枝誠記である。『国語学原論』（昭16　岩波書店）では、言語過程説による詞辞論に基づいて敬語をも詞の敬語と辞の敬語に分け、前者は上下・尊卑の概念的把握であって敬意の対象を詮索できないが、後者は聞き手を対象とする敬意の直接的表現の語であるとする。さらに、山田の人称説と時枝の素材・話し手・聞き手の説とを批判発展させたものとして石坂正蔵『敬語史論考』（昭19　大八州出版）が注目される。

以上のとおり、太平洋戦争終結以前の敬語研究は敬語の構造を明らかにすることに主眼が置かれていた。ところが、戦後になると、構造のみならず敬語行動や意識などにも目が向けられるようになった。その代表的なものとしては、数学的方法によって演繹的に待遇関係を想定し、それが言語形式にどのように表れるかを考究した水谷静夫『待遇表現の基礎』（昭30　文部省編）、社会心理学的な方法を取り入れて地方言語の実態調査をした国立国語研究所『敬語と敬語意識』（昭32　秀英出版）、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

時枝の体系に従いつつ近世の敬語資料について待遇表現の対応に焦点を絞って精査した山崎久之『国語待遇表現体系の研究』（昭38　武蔵野書院）などがある。これらの研究は敬語を広く「待遇表現」(注1)の観点で取り上げたものとして注目される。また辻村敏樹は敬語の史的研究に関する論考を続けて発表してきたが、それを『現代の敬語』（昭42　共文社）、『敬語の史的研究』（昭43　東京堂）の二書に相次いでまとめ、昭和46年には春日和男・森野宗明・桜井光昭・小松寿雄・宮地裕と分担執筆で『敬語史』（大修館）を著した。こうした敬語研究の盛行を背景に昭和40年代には大石初太郎氏の『正しい敬語』（昭41　大泉書店）をはじめ、敬語の使い方に関する著書も数多く出版された。

この時期においては、敬語の対象を広くとらえようとする考え方が広まってきた。言語形式中心の研究から脱皮して行動としての敬語の研究へという新しい傾向である。南不二男・林四郎などによれば、敬語は敬意表現の言語行動ということができるが、それは一方に非言語的な行動（態度・物腰・行動様式等）と深くかかわりを持つし、また息づかい・身振り・表情等、直接言語表現に連なる諸動作（随伴行動）なしに行われることはないので、こうしたものをすべて含んだ敬意表現の行動の中で、敬語はどのような位置を占めるかといった観点から考察すべきだとされる。

第二節　敬語研究の課題

以上のとおり、これまでの敬語研究は大きく分けて、敬語を主として体系的に捉えるものと、行動的に捉えるものとがある。体系的な敬語研究には、各時代の敬語を体系的あるいは個

別的に取り扱うものと、多く現代語の敬語を中心に敬語の本質や分類・意味などを論ずるものとがある。

行動的な敬語研究とは、敬語を待遇表現全体の中の問題として取り上げるとともに、敬語表現を敬語的行動との関連においてとらえようとするものである。南不二男氏によって代表されるこの考え方では、「敬語」とか「敬意表現」というとき、話し相手または話題の人物を高く扱ったり、自分がへりくだったりする、普通の敬語表現だけでなく、相手や話題の人物をののしったり、いやしめたり、自分自身が尊大な態度をとったりする軽卑表現や尊大表現なども含め、かつ表現手段も、言語形式・言語表現だけでなく、それに付随的な非言語的表現まで含めている(注2)。

ところが、こうした広い意味で取り上げられたものをすべて含んだ敬意表現の行動の中で、敬語はどのような位置を占めるかといった観点から考察するのは、その進展が期待されるとともに、なかなか容易ではないとも言われている。これはなぜかというと、この観点を発展させるためには敬語というものを社会学や心理学の観点や手法から研究する必要が生じるからである(注3)。

さらに、「狭義の〈敬語〉や〈待遇表現〉は、日常の言語行動におけるさまざまな〈敬意/丁寧さ/印象のよさ/配慮/適切さ〉をすべてカバーするものではない。狭義の〈敬語〉や待遇表現〉にとどまらない、さらに広い意味での敬意/丁寧さ/印象のよさ/配慮/適切さ〉などを捉えて行くことは、必要なことである。近年提唱された〈ポライトネス〉あるいは〈敬意表現〉といった概念は、そのような趣旨のものとして理解できる」が、「〈ポライトネス〉や〈敬意表現〉の研究をめざす場合には、対象が大きく広がることに伴って、高い研究水準を確

立していく上での困難もある」という菊地康人のような考えもある[注4]。

かつての身分の上下を認識して使い分けられる敬語体系のフォームから、もっと広い意味で人を待遇する様々な「待遇表現」、及びその周辺の敬語的表現、非敬語行動まで、時代の移り変わりとともに、このように敬語・待遇表現に関する研究がより広い視点で捉えられている。敬語・待遇表現は固定化、構造化されている問題ではなく、対人関係を円滑に運んでいこうとするものとして、能動的に扱われるべきである。

第三節　筆者の敬語研究

本書で筆者はコミュニケーション行動における敬語・待遇表現の研究というものを目指している。敬語・待遇表現の静態的なあり方としてその体系を追究するだけでは不十分である。体系というのは一種の抽象的な存在であって、現実に行われているものは人間相互の間で交わされる日々のコミュニケーションである。現実のコミュニケーションを視野に置かないかぎり、敬語・待遇表現の真のあり方を捉えたことにはならない。すなわち、現実のコミュニケーション活動を視野に入れないかぎり、敬語・待遇表現というものを充分に描くことはできないのではないかと思われる。

筆者はこれまで討論番組やトーク番組、娯楽番組など、様々なジャンルのテレビ番組における登場人物の言葉づかい、敬語使用の実態などを考察し、広い意味で捉えた敬語・待遇表現を対象として観察・記述を進めてきた[注5]。テレビ番組において、会話がどのように進むか、登場人物はいつ、どういう状況で、どのようなコミュニケーションをとるかなど、実際に行われる

コミュニケーション行動を分析した上で、過剰敬語や敬語回避、人間関係・場・時などによる待遇表現の使い分けの様態を明らかにした。さらに、敬語の使用頻度や、敬語行動と年齢層との関わりなども考察した。これまでの研究から、実際の敬語・待遇表現使用はバリエーションや個人差が顕著であって、良い対人関係を築く円滑なコミュニケーションのためには、敬語回避などのストラテジーも重要な要素になることが明らかであった。

最近の言語研究では、談話分析の研究が進められて成果を上げている。談話分析における敬語研究においては、敬語的表現についてはコミュニケーション行動の中で、談話の際に話し手と聞き手がコミュニケーションを円滑に行うための手段・方法として取り扱う。すなわち、敬語・待遇表現というものを円滑なコミュニケーションのためのストラテジーとして、話し手自身の積極的な意図に基づく言語運用のしかたとして捉えているのである。

通常の敬語研究では、従来伝統的に一つの文を最大の枠としてその枠内で規定できるというような性質について規範化する体系的な研究を行ってきたが、「談話」のレベルでは、しばしば文という枠を越えた延長、つまり文以上のまとまりを研究対象とし、文にはない世界（人物の同一性、場の同一性など）を持っていることを研究の問題にするのである。例えば、同じ代名詞が違う人を指示したり、異なる呼び方を同一人物に対して用いたりする現象、同じ対人関係の中で場面や時によって言葉づかいを使い分ける、などのようなことを問題にするには、文以上のレベルがなければならない。敬語・待遇表現について文レベルで捉える語彙論や文法論は言語構造の問題であり、「談話」はそれを使用する言語行為の痕跡である。このような

行為の痕跡を分析することによって、より具体的、有効的に敬語・待遇表現を考察、研究することができると考えられる。今後の敬語・待遇表現研究において「談話分析」が有効な研究方法であると言えよう。

本書では、敬語論と談話論を踏まえたうえで、談話分析理論を採用して漱石作品における敬語・待遇表現の談話分析研究を行う。ここでまず談話分析理論の枠組みについて説明しよう。

第四節　談話分析理論の枠組みについて

敬語・待遇表現のような言語行動それ自身はダイナミックに展開する総合的な営みであるが、それについての研究は、研究というものが一般にそうであるように、言語行動を構成するいずれかの特徴や要素に分割して行うことが多い。

これまで行われてきた言語行動の研究は、取り上げた単位あるいは対象の大きさという観点から整理するとき、まず、次の二つに分けることができる(注6)。

(a) 言語行動を、最大でも一つの発話（文）に限定し分析するもの

(b) 言語行動を、対話者間の相互作用、あるいは発話の連鎖として捉え、その、時間軸に沿って展開する状況を把握しようとするもの

(a) の方法では、単一の発話の在り方の多様性と、聞き手の属性や場面などの言語外的条件との間に何らかの規則性（相関関係）を見出していくという方法を採ることが多い。しかし一方では、実際の言語行動は、単一の発話だけで完結するとい

うことはあまりない。たとえば相手に誘おうとするときには、誘おうとする側は、まず聞き手に都合を確認し、その返答によって本題に入るということをするのがふつうである。(b) の立場は、このような発話の連鎖という、言語行動の実態により忠実に対処すべく展開してきた研究の立場である。方法論的には、(a) が社会言語学（や語用論）、(b) が談話分析や会話分析に顕著なものである。

本書では、主に (b) の研究方法に焦点をあて、「談話分析」の観点から敬語・待遇表現を対話者間の相互作用、あるいは発話の連鎖として捉える。

1　「談話」について

国語学における「談話」という用語の概念について、『言語学大辞典』では以下のとおり詳しく説明されている（三省堂　1996）。

> 談話は、テキストと同義で使われることもある。その場合、「テキスト」はヨーロッパ系の研究者が、「談話」はアメリカ系の研究者が用いる傾向がある。一方、談話とテキストを別概念とすることもある。この場合は、「話されたもの」対「書かれたもの」、「表現・理解行為」対「（音声・文字で）産出されたもの」、あるいは、「発話としての実現物」対「抽象的構成体」などといった区別がなされる。また、テキストは談話を構成する要素であるとみる人もいる。
>
> 国語学では、談話に当たる概念として「文章」という用語が用いられている。書かれたものをさすことが多いが、話されたものを含めることもある。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com